

デーリー東北

2022年(令和4年)11月29日(火曜日) (21)

私見 Tuesday 創見

南部の秋は菊。鑑賞用の大輪の菊も素晴らしいが、農家から手早く花びらをむしる。煙が一面、阿房宮の

黄色に染まる菊の季節を懐かしく思い出す。毎日の収穫は大忙しだ。昔は蒸し菊、干し菊を家内で加工し出荷していた。つんでき

たら即座に加工しなければ花はすぐに傷んでしまう。花軸から手早く花びらをむしると、瞬く間に山盛りになる。花びらを円形の平たいざるに敷き詰め、まきストープの蒸籠で次々と蒸していった。手拭いを「姉さまかぶり」にした母が、蒸し上がったものをむしるのう上に等間隔にひつくり返していく。もうもうとした湯気の中、次から次へと菊の満月が仕上がっていく様は壮観だった。

夜は、菊の月を載せたむしりを何段も重ねて、縁側に吊し、自然乾燥させる。秋の夜は菊の香に包まれて眠るのだった。菊のかぐわしさは幼い心にも染みわたる。嗅覚の記憶は思い出の中でも最も強いものと聞く。菊の香に包まれて眠った夜は、収穫の秋の満ち足

八戸の菊と小井川潤次郎

土地に学び土地を育てる



かわもりた・れいこ
1967年、旧福地村生まれ。東北大文学部卒。八戸工大二高を経て、2001年より八戸工業大で勤務。人形浄瑠璃文楽などの伝統芸能や染織に関わる伝統文化、特に南部菱(ひし)刺しが研究テーマ。第3回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞を受賞。文楽はちのへ塾主宰。

川守田礼子

八戸工業大 感性デザイン学 准教授

りた気分、冬へ向かうさえた夜気と共に、「香嵐」として心に刻まれている。見てよし、食べて良しの南

部の銘物。八戸でも昔から菊の栽培が盛んだ。毎年、「はちのへ菊まつり」が開催される。メロディーとして使用される。「八戸小唄」の歌詞にも「城下二万石 菊の里」と歌われている。

「八戸の菊」に関わった人物に、八戸の民俗研究家の小井川潤次郎がいる。父元吉が菊作りの名手だった。日本園芸会の菊花賞評会の審査員も務めた。父とともに八戸佳友会から出品した鉢植え大菊がひときわ異彩を放ち、菊の栽培地として八戸が、全国的に注目を集めるようになった。

内屋一橋本八右衛門を後盾に米沢徳藏等と共に菊を蒐集栽培し、新井田の対泉院にその壇花壇を作っていた。この時からの「八戸の菊」。西の京都と共に双璧と言われ大菊では名が知られた」とある。

実は小井川は、南部菱刺しを復興させた人物でもある。明治以降の流通近代化と衣生活文化の変容により、人々の暮らしから菱刺しが消えようとしていたころ、「民藝運動」の柳宗悦や、津軽地方の大川亮、相馬貞三らとの交流を通して、復興活動を思い立つ。市内で講習会を開催し、国内外の展覧会に作品を出展するなど、菱刺しの価値向上と技術継承に尽力した。

著書の『八戸の四季』に「河

小井川の足跡をたどっていくと、郷土研究の熱心さ、研

究対象の多様さに驚く。主軸は民俗学で、特に民間信仰のオシラサマやイタコの研究が有名なのだが、種彦海岸、縄文遺跡、根城城址、えんぶり、八幡馬など、現代の地域の文化資源、観光資源と称されているものが多く関わっていることが分かった。

地域文化確立の貢献者と言いたい。「この土地に学び土地を育てることを考えなければと思うのだった」という小井川の言葉をいま一度かみしめたい。

最後に『八戸の四季』に掲載されている菊料理を紹介する。むしった花びらを大根おろしと共にみそ汁に放した菊汁、ゆであえた菊鱈、阿房宮の薬のてんぷら、皆さんの食卓にもいかがですか？